

C-28 気管内吸引の技術について —左右気管支内への吸引カテーテル挿入確立—

和歌山県立医科大学附属病院救命救急センター

泉 仁美 志田 光恵 中岡 愛 岡室 優 川崎 貞男

【背景】喀痰の吸引は気管内挿管患者の肺炎防止に大きな役割をもつ。咳嗽反射の少ない人では左肺に喀痰が貯留することが多く、左右の気管支を意図的に吸引することは重要である。

【目的】開放型吸引法によって左右の気管支に吸引カテーテルを意図的に挿入できる確率を直型・曲型吸引カテーテルに分けて調査する。

【対象】当センターに勤務する看護師で調査の同意が得られた 30 名。

【方法】1) モデル気管支を使用し、通常行なっている吸引方法で直型吸引カテーテル（直管）・曲型吸引カテーテル（曲管）を用いて左右の気管支内に各 30 回挿入する。2) 意図した方向に吸引カテーテルを挿入できる回数を、使用するカテーテル間で比較する。3) 卒後年数および ICU 経験年数での差を比較する。

【結果】直管を右気管支に挿入できたのは平均 26.5 回、左気管支では平均 6.9 回であった。曲管を右気管支に挿入できたのは平均 29.6 回、左気管支では平均 10.2 回であった。右気管支に吸引カテーテルを挿入できる確率は曲管の方が直管よりも有意に高かった（ $p < 0.02$ ）。左気管支に挿入できる確率は両カテーテルともに右より低く、カテーテル間で有意な差はな

かった。卒後年数および ICU 経験年数と左気管支に吸引カテーテルを挿入できる回数に低い相関があった。

【結語】1) 右気管支に意図的に吸引カテーテルを挿入できる確率は直管よりも曲管の方が有意に高い。2) 左気管支に吸引カテーテルを挿入できる確率は直管・曲管でともに低い。3) 卒後年数および ICU 経験年数で左気管支に挿入できる回数に弱い相関があった。4) 左気管支に吸引カテーテルを挿入できるよう技術指導が必要である。